ISSN 2187-0772

エジプト学研究第 19 号　2013 年

The Journal of Egyptian Studies Vol.19, 2013

目次

〈序文〉 …… 吉村作治 …… 3

〈調査報告〉

2012 年　太陽の船プロジェクト　活動報告 …… 黒河内宏昌・吉村作治 …… 5

エジプト　ダハシュール北遺跡発掘調査報告－第 18 次発掘調査－
…… 吉村作治・矢澤　健・近藤二郎・西本真一 …… 15

第 3 期アメンヘテプ 3 世王墓壁画保存修復プロジェクト概報
…… 吉村作治・西坂朗子・高橋寿光 …… 43

アメンヘテプ 3 世王墓壁画に使用された顔料の化学分析
…… 高橋寿光・西坂朗子・阿部善也・中村彩奈・中井　泉・吉村作治 …… 59

アメンヘテプ 3 世の石棺蓋の保存修復作業概報
…… 吉村作治・苅谷浩子・西坂朗子・高橋寿光 …… 97

第 5 次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報
…… 近藤二郎・吉村作治・柏木裕之・河合　望・高橋寿光 …… 107

エジプト国家形成期の集落址調査－ヒエラコンポリス遺跡 HK11C における近年の発掘調査－
…… 馬場匡浩 …… 121

〈論文・研究ノート〉

ナイル川下流域における石製容器の出現と展開に関する一考察－模倣と技術からみたその系譜－
…… 竹野内恵太 …… 135

〈卒業論文概要〉

ナイル川下流域における石製容器からみた初期国家形成の様相
－先王朝時代から第 1 王朝時代を対象として－ …… 竹野内恵太 …… 151

古代エジプト・建造物の天井に残されたネクベト画像の考察 …… 大橋陽子 …… 159

〈活動報告〉

2012 年度　早稲田大学エジプト学会活動報告 …… 167

2012 年　エジプト調査概要 …… 171

〈編集後記〉 …… 近藤二郎 …… 177

The Journal of Egyptian Studies Vol.19, 2013

CONTENTS

Preface ……Sakuji YOSHIMURA …… 3

Field Reports

Report of the Activity in 2012, Project of the Solar Boat
……Hiromasa KUROKOCHI and Sakuji YOSHIMURA…… 5

Preliminary Report on the Waseda University Excavations at Dahshur North: Eighteenth Season
……Sakuji YOSHIMURA, Ken YAZAWA, Jiro KONDO and Shinichi NISHIMOTO…… 15

Report on the Conservation Work on the Wall Paintings in the Royal Tomb of Amenophis III (KV 22)
……Sakuji YOSHIMURA, Akiko NISHISAKA, and Kazumitsu TAKAHASHI…… 43

Chemical Analysis of the Pigments Used in the Wall Paintings of the Royal Tomb of Amenophis III
……Kazumitsu TAKAHASHI, Akiko NISHISAKA, Yoshinari ABE,
Ayana NAKAMURA, Izumi NAKAI and Sakuji YOSHIMURA …… 59

Report of the Conservation of Sarcophagus Lid of Amenophis III
……Sakuji YOSHIMURA, Hiroko KARIYA, Akiko NISHISAKA, and Kazumitsu TAKAHASHI…… 97

Preliminary Report on the Fifth Season of the Work at al-Khokha Area in the Theban Necropolis
by the Waseda University Egyptian Expedition
……Jiro KONDO, Sakuji YOSHIMURA, Hiroyuki KASHIWAGI,
Nozomu KAWAI and Kazumitsu TAKAHASHI…… 107

Excavating Settlement site in the era of Ancient Egyptian State Formation:
Recent Excavations at HK11C, Hierakonpolis ……Masahiro BABA…… 121

Articles

Some Remarks on the early development of the Stone Vessels in the Nile Valley
……Keita TAKENOUCHI…… 135

Summary of the Recent Undergraduate Theses……151

Activities of the Society, 2012-13…… 167

Brief Reports of Fieldworks in Egypt, 2012……171

Editor’s Postscript…… Jiro KONDO…… 177

研究ノート

ナイル川下流域における石製容器の出現と展開に関する一考察
－模倣と技術からみたその系譜－

竹野内　恵太

Emergence and Evolution of the Stone Vessels in Nile Valley: The Development Observed from Imitation and Manufacturing Technique

Keita TAKENOUCHI*

Abstract

Stone vessel was funerary equipment through Predynastic period in Nile valley. In this period, stone vessel was manufactured from various rock by specialized artisan, and some scholars have pointed out that stone vessel was luxury or prestige goods.

Previous studies have constructed typology and chronology of stone vessel in Predynastic period since sequence dating by Petrie, W. M. F. However, these typological studies have never analyzed and interpreted the transition of stone vessel in the historical context and or based on a quantitative analysis.

This paper focuses on the transition of the stone vessel in Nile valley from Neolithic to Naqada IID, and reconsiders the transition from two viewpoints of imitation and manufacturing technique. Firstly, I examined the alternative shapes classification of stone vessel from nine sites in Upper and Lower Egypt dated to Naqada IC to IID. Next, based on the classification, I analyzed the transition of shape and material, and the following point were made clear by this analysis: the transition of the stone vessel could classify into three periods by shape and material: Neolithic era = “Emergence”, Naqada IC to IIA-B = “Formation”, Naqada IIC-D = “Development”.

These results indicate the breaking off between both period, “Formation” and “Development” in a view from imitation and manufacturing technique. Until “Formation”, stone vessel had imitated a shape of pottery and ivory vessel. But contrary to previous period, stone vessel was imitated in “Development”. In particular, stone vessel in this time is characterized by emergence of tubular handle. It is possible that judging from the analysis of two attributes (stone vessel handle and bead form), the serious change of stone vessel in Naqada IIC-D (“Development”) can be reflected the advancement of manufacturing techniques and or the directivity to tubular form. This consequence suggested that there might have been a technological choice in each shape, each material and each period in Predynastic period.

＊ 早稲田大学大学院文学研究科修士課程

＊ *Graduated Student, School of Letters, Arts and Sciences, Waseda University*

１．はじめに

ナイル川下流域において石製容器の初現は新石器時代のバダリ文化期にまで遡り、先王朝時代のナカダ文化期ごろにその生産が高まる。土器や石器に次いで豊富に出土し、主として副葬用に製作されていた当該期の石製容器は、ナイル川下流域および東部・西部砂漠から産出する多様な石材が用いられ、奢侈品あるいは威信財としてのあり方が早くから指摘されている。紀元前 3 千年紀末から 2 年紀初頭、初期王朝時代という統一国家が形成された時期と同じくして、石製容器の急増と王墓および高官墓へのその副葬が顕著になる。とくにサッカラやアビュドスといった王墓地に比定されている墓地では、墓 1 基につき数 100 個体もの石製容器の副葬がみとめられる。以降、石製容器の生産と分布は普遍的な広がりを見せ、副葬品・日常用具問わず、古代エジプトにおいて一般的な物品としてその姿を確立させていく。それゆえ、当該地域の石製容器生産は、先王朝時代に一つの画期を位置づけることができる。

先王朝時代における石製容器の器形分類の研究は、19 世紀末のピートリ（Petrie, W. M. F）の SD 編年研究を端緒として、各研究者が各々の分類案を提示し、一定の編年観が構築されるに至っている。それらの成果によって、石製容器の器形や素材となった石材の構成が漸次的に変化することがわかり、土器や象牙製容器といった他の容器類との対応関係も指摘されるようになった。しかし、器形の変遷について有機的なつながりは描出されておらず、どのような影響下で、どこでそれらの器形が出現し、展開したのかといった系譜に関する石製容器の器形に言及した具体的な研究例は管見に触れず、あくまで断片的・記述的な指摘に終始するのみである。考古学においてある程度の分類と編年が構築されると、どのような要因・影響の下で形が変化したのかについて議論しなければいけない。このような状況に鑑み、本論では定量的な分析から、土器やその他容器類との模倣や影響の相互関係を分析し再検討するとともにその系譜関係を整理し、模倣と製作技術という視点に立脚して石製容器の器形の歴史的変遷をまとめることにする。

２．本論の器形分類と編年案

(1) 先行研究と本論の目的

先王朝時代の石製容器は、ピートリによる SD 編年の構築作業（Petrie 1896, 1901, 1920）を基礎研究の嚆矢として、諸研究者が各論を展開するに至る。近年では、ストックス（Stocks, D. A.）による製作実験を通じた製作工程における動作連鎖の復原（Stocks 1993, 2000）や、マロリー・グリーノー（Mallory-Greenough, L. M.）の玄武岩製容器の理化学分析や分布研究（Mallory-Greenough 1999, 2002）など、多角的な研究の方向性を示す。

最も基礎的な作業である器形分類についても、ピートリ以降、コーリ（El-Kouli, A.）やペイン（Payne, J. C.）、アストン（Aston, B. G.）などが分類案を構築し、一定の編年観を築き上げてきた（El-Kouli 1976; Payne 1993; Aston 1994）。しかしながら、器形の変遷が具体性を帯びつつも、その変化を定量的な分析から歴史的に位置づけようとした研究はこれまでなされていない。断片的な指摘のまま、今日に至っているのが現状である。とくに、ナカダⅠC 期からⅡD 期にかけて石製容器は器形・石材ともに大きな変化を見せ、他の容器類との模倣現象も観察することができ、当該期の石製容器の変化はきわめて動的であると言える。そこで本論では、ナカダⅠC 期からナカダⅡD 期における石製容器の変化の実態を追うべく当該期の器形を再分類し、器形と石材両者の時期別・遺跡別の変遷を定量的に分析していく。また、3 章からは、その分析結果を基に、石製容器の変遷を模倣と製作技術という二つの視点から経時的に考察する。本来であれば精緻な製作実験を通して技術論を語らなければいけないが、本論で述べる技術とは、あくまで器形とそれに付随する属性および石材種やその硬度から類推したものであることに留意する必要がある。ストックスによる

と石製容器製作には多様な道具を用いられ、加工に費やされる時間も石材ごとに一定ではないという（Stocks 1993, 2000）。彼の実証的な研究は、素材となる石材の種類や器形に応じて運用される技術あるいは道具も定型的なものではなかったことを示唆する。すなわち、器形や石材が漸次的に変化するⅠC期からⅡD期は、その間技術も不変ではなかったと想定しうる。よって、本論では、ナカダⅠC期からⅡD期の石製容器を再分類したのち、他容器との模倣関係や製作技術という観点からその変化を考察していくこととする。

(2) 対象資料と分析方法

上述したように、石製容器の器形については、すでに一定の分類案が提示されている。初めて体系的な分類を試みたコーリは、先王朝時代から第3王朝時代に属する石製容器を約5600個体集成したのち、円筒形と把手付壺形、無把手壺形の3クラスに大別し、そのクラスの中で計36のサブクラスに分類した。さらに個々のサブクラスにおいて、口縁部や胴部、底部、装飾、把手の形状などの属性を抽出して細別を試みている（El-Kouli 1976）。のちにアストンがコーリの細分に対して否定的な見解をもち、属性をほとんど加味していない、時期ごとに主流となる器形のみを抽出した大雑把な分類設定を行っている（Aston 1994）。また、ペインは、アシュモレアン博物館所蔵資料を元に、把手の有無を上位のクラスに置いた分類案を示した（Payne 1993）。博物館所蔵資料という資料的制約のため、氏の分類案はやや汎用性に欠けると言える。最近になってマロリー・グリーノーが玄武岩製容器の分布と器形の変遷を分析した際に、先王朝時代から第1王朝時代に年代づけられる500個体の資料から器形を分類したが、氏の分類案もまた玄武岩製という資料上の制約のため、汎用できるか否かといった是非の議論を待たない（Mallory-Greenough 2002）。

先行する分類案にはこのように分類上の問題と資料数の偏りのため汎用性が低い。また、上下エジプト各遺跡を縦断する資料をもって定量的な分析から先王朝時代の石製容器を分類した総体的なものはなく、また現在示されているようなより詳細な相対編年に基づく石製容器の器形編年も行われていない。そのため、本論では新たな分類案の構築が望まれる。よって、デルタ地帯から上エジプト地域にかけて立地する、ミンシャト・アブ・オマル遺跡（Minshat Abu Omar）・ゲルゼ遺跡（Gerzeh）・ハラゲ遺跡（Harageh）・マトマール遺跡（Matmar）・バダリ遺跡（Badari）・モスタゲッダ遺跡（Mostagedda）・アムラー遺跡（Amrah）・ナカダ遺跡（Naqada）・アルマント遺跡（Armant）の9遺跡（図1）から出土した総計200個体のナカダⅠC期からⅡD期に年代づけられる石製容器を集成し、新たに分類設定した[1)]。時期については、ヘンドリックス（Hendrickx, S.）の編年に依拠して、ナカダⅠC期、ナカダⅡA-B期、ナカダⅡC-D期の3時期（以下、ⅠC期、ⅡA-B期、ⅡC-D期）に区分した（Hendrickx 2006）。

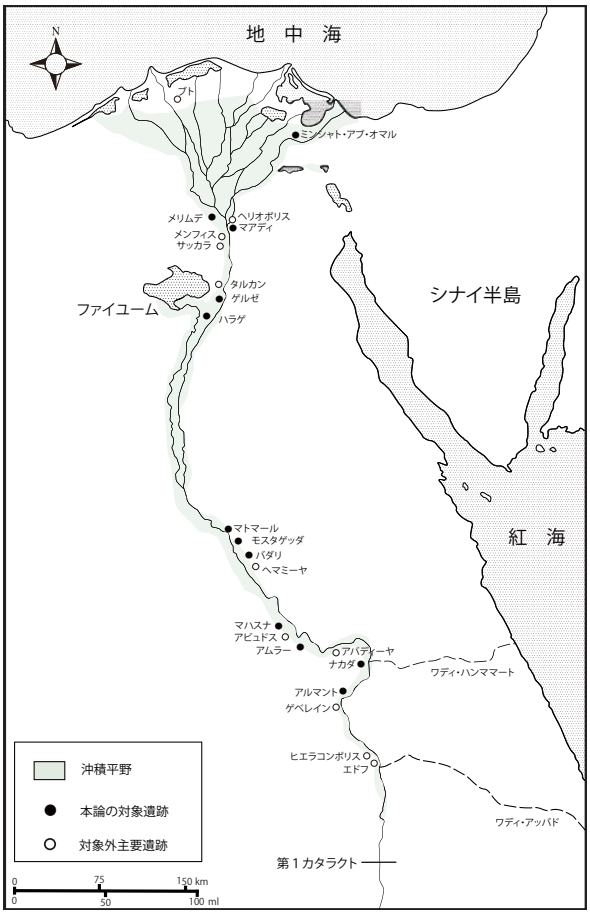

図1　ナイル川下流域全図

対象とした石製容器の器形分類は、近年ペインやマ

ロリー・グリーノーが設定した分類方法に概ね準拠する。新石器文化期に属する石製容器は本論でも言及する対象資料であるが、資料数の少なさと明確に器形を判定できないため、当分類設定のための資料には用いていない。また本論では、分類の煩雑を避けるために、コーリのような仔細な属性を分類項目には設けない。器形分類の概要は以下の通りである。

・Ⅰ類：ビーカー形から円筒形を呈するもの
　Ⅰa 類：口縁が若干外反するビーカー形
　Ⅰb 類：口縁が大きく外反して胴部が内湾し、底部も口縁と等しく外反するビーカー形
　Ⅰc 類：口縁が外反せず、直胴であり、細身な円筒形
　Ⅰd 類：口縁が若干外反し、胴部が内湾する円筒形
・Ⅱ類：管状把手付き壺
　Ⅱa 類：胴部が卵形で、把手がついた小振りの壺
　Ⅱb 類：胴部が張り、把手がついた壺
　Ⅱc 類：肩部が張り、把手がついた壺
　Ⅱd 類：胴部が下膨れになる、把手がついた壺
・Ⅲ類：耳状把手 [2]・脚台付き壺
　Ⅲa 類：砲弾状の胴部を持ち、把手と円錐形の器台がついた壺
　Ⅲb 類：胴部が張り、把手と円錐形の器台がついた壺
　Ⅲc 類：卵形の胴部をもつ、把手と円錐形の器形がついた壺
　Ⅲd 類：砲弾状あるいは円筒形の胴部をもち、把手がついた壺
・Ⅳ類：皿・鉢・坏
　Ⅳa 類：皿・・・口径と底径がほぼ等しく、器高が極端に低いもの
　Ⅳb 類：平底鉢・・・平底で、器高と口径の比が 1:4 以下から 1:2 未満のもの
　Ⅳc 類：丸底鉢・・・丸底で、器高と口径の比が 1:4 以下から 1:2 未満のもの
　Ⅳd 類：坏・・・平底で、器高と口径の比が 1:2 以下から 1:1 未満のもの
　Ⅳe 類：坏・・・平底で、口縁から底部上部までは直胴だが、そこから底面にかけてすぼまる
・Ⅴ類：無把手壺
　Ⅴa 類：肩部または胴部が張り出した壺形
　Ⅴb 類：底部が下膨れの壺形
　Ⅴc 類：尖底の壺形

また、石材分類については各報告書の記載に依拠し、石灰岩、エジプト・アラバスター、玄武岩、斑岩、粘板岩、蛇紋岩、片岩、硬砂岩、花崗岩、角礫岩、閃長岩、凝灰岩とする。20 世紀初頭の報告書では火山岩（Volcanic Ash）と表記しているが、ハレル（Harrel, J. A）らが指摘したように、凝灰岩（Tuff, Tuffneous rock）が岩石名称として正しいため、本論でもそれに準拠する（Harrel et al 2000）。

(3) 分析結果と編年観

以上の分類案でⅠC 期からⅡC-D 期まで器形を時期別に分析し、分析結果を表 1 に示した。表 1 の分析結果に新石器文化期と下エジプトのマアディ遺跡の石製容器を加えた編年案が図 2 である。以下、新石器文

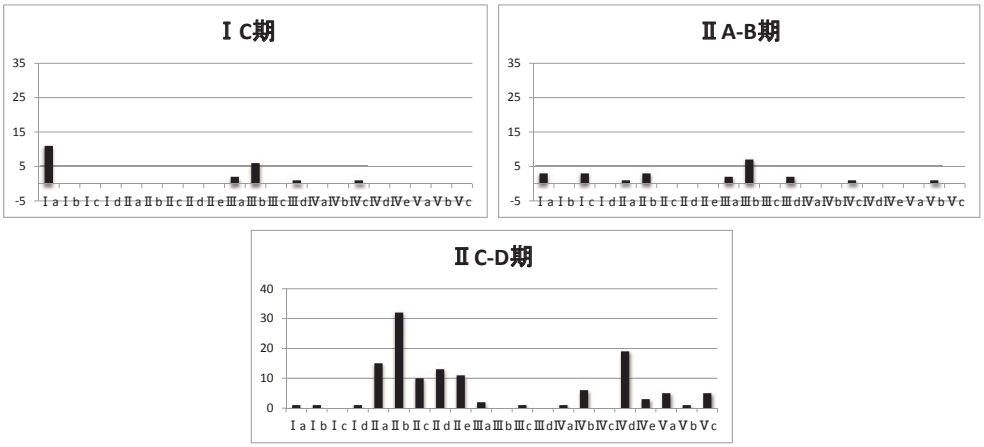

表 1　ナカダⅠ C 期からⅡ C-D 期における石製容器の器種構成の変遷

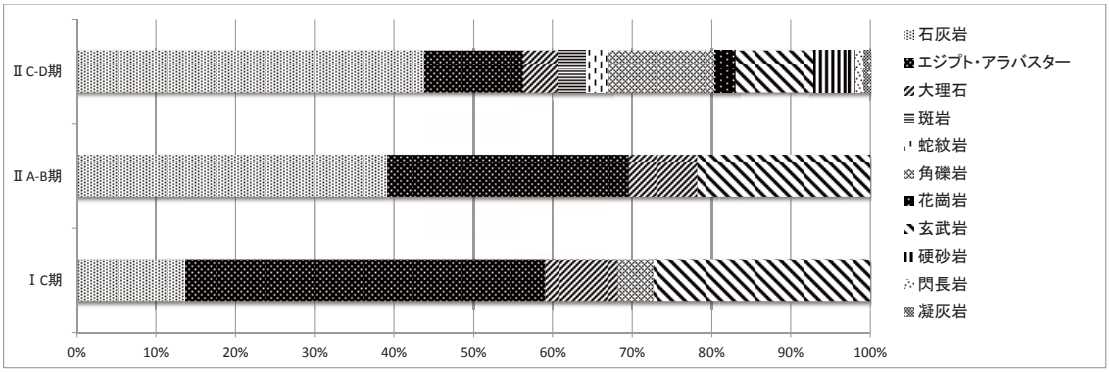

表 2　ナカダⅠ C 期からⅡ C-D 期までの石製容器における石材構成の変遷

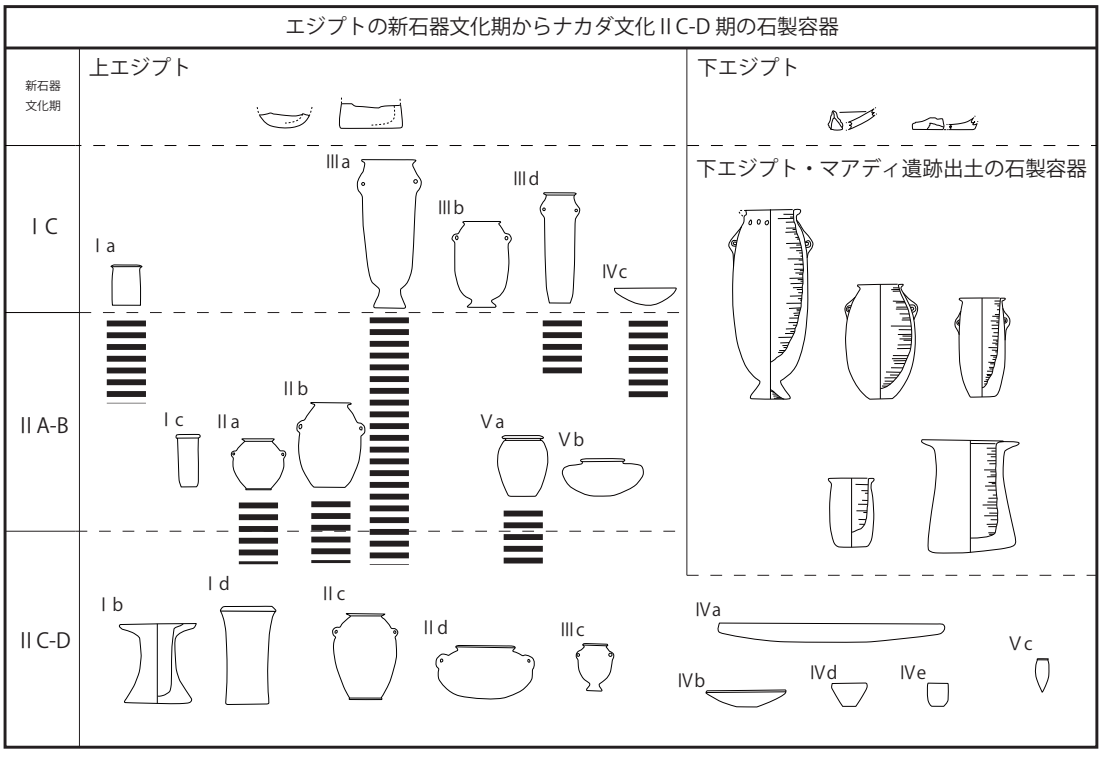

図 2　新石器文化期からナカダⅡ C-D 期までの石製容器の変遷

化期の石製容器の器形に関する知見を交え、経時的に分析結果を述べていくことにする。

新石器文化期に属する石製容器は、５個体と少量であり、主に底部片しか出土していない。バダリ遺跡出土のものは丸底の壺形および平底を呈するビーカー形であることが想定される。新石器文化期には個体数が限定的で出土量も限定されるが、Ⅰ C 期から増加がみとめられる。この時期にはⅠ a 類とⅢ類が主体をなす。Ⅲ a 類は下エジプトのマアディ遺跡出土石製容器のタイプ 3a で、Ⅲ b 類はタイプ 2a もしくはタイプ 2b に該当する（Rizkana and Seeher 1988）。Ⅱ A-B 期になると、Ⅱ a 類とⅡ b 類およびⅤ類が出現するが、未だⅠ類とⅢ類が圧倒的多数を占め、出土量も概ね変化ない。マアディ遺跡においてⅠ c 類は、無把手のタイプ 3 に相当する。次ぐⅡ C-D 期には、石製容器の大きな変化が認められ、当該期にはⅠ類およびⅢ類と取って代わるようにⅡ類が急増し、それに伴いⅣ類も増えるとともに、出土する遺跡分布も広がりを見せる。下エジプトのハラゲ遺跡やゲルゼ遺跡、デルタ地帯東部に位置するミンシャト・アブ・オマル遺跡でも上エジプト出土の石製容器と同一の器形が確認できる。Ⅱ C-D 期ではⅡ類が主流となり、出土量から見ても前時期とは様相を異にすることがわかるだろう（表１）。

同じように、石製容器に用いられた石材の構成においてもⅡ C-D 期を画期として捉えることができる（表２）。Ⅰ C 期ではエジプト・アラバスターが主体となり、次いで玄武岩、石灰岩が高い比率を示す。Ⅱ A-B 期になると、石灰岩が主体となるが、基本的にエジプト・アラバスターと石灰岩、玄武岩という石材構成は概ね変化ない。そしてⅡ C-D 期であるが、当該期ではエジプト・アラバスターの構成比率が極端に低下し、石灰岩が増加の一途を辿るものの、新たに斑岩や蛇紋岩、角礫岩、花崗岩、硬砂岩、閃長岩、凝灰岩が用いられ始める。とくに斑岩や角礫岩、硬砂岩、凝灰岩は東部砂漠にのみ産出する硬質な岩石である。石材構成からみてもⅡ C-D 期には石製容器において大きな変化が認められ、一つの画期として捉えることができる。

上述した器形編年と石材構成の変遷から本論ではナカダ文化Ⅱ C-D 期までの石製容器を３時期に分類できることがわかった。石製容器が出土し始める時期である新石器文化期を「出現期」、エジプト・アラバスターと石灰岩、玄武岩を主とした石製容器が一定量出土し、明確な器形が形成されるⅠ C ～Ⅱ A-B 期を「形成期」、前時期よりも飛躍的な絶対量の増加と分布の広がり、容器形態と石材構成の変容を見せるⅡ C-D 期を「展開期」と呼称して、本論では３時期を軸として模倣や技術の系譜を考察していくこととする。

３．石製容器の出現と展開

(1) 新石器文化期（出現期）

ナイル川下流域において最古の石製容器として知られるものに、メリムデ・ベニサラーマ遺跡とファイユーム遺跡、バダリ遺跡の３遺跡がある（Lucas and Harris 1989）。上エジプトのバダリ遺跡出土のバダリ文化期に属する石製容器は、胴部下部から底部まで残存しているものが２個体あり、それぞれ丸底と平底を呈する（Brunton and Caton-Tompsom 1928）。丸底の底部をもつ容器は玄武岩製で、平底の底部をもつものは石灰岩製である。丸底の石製容器は磨石を模して製作されたことが指摘されているが（Shaw 2012）、底部の形態および底部から胴部への立ち上がり方を見ると、バダリ文化の黒頂土器に

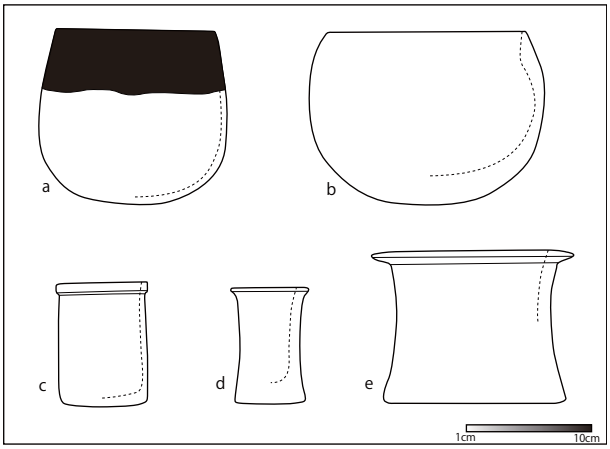

図３　バダリ遺跡出土バダリ文化期の土器と象牙製容器
（a：黒頂土器、b-e：象牙製容器）
（Brunton and Caton-tompson 1928: Pl.XV, XXIII をもとに作成）

一般的な器形である Bag-shape を模したものであることがわかる（図 3 -a)。また、象牙製容器にも同様の器形をもったものが出土しているため（図 3 -b, c)、当該期の石製容器は土器型式を模倣したものと考えた方が妥当であろう。石灰岩製の平底の方も土器および象牙製容器にその底部形態がみとめられ、いずれにせよこの時期の上エジプト出土石製容器の器形は、素材を異にする他の容器形態からアイディアを受容する形で創出していたことが考えられる。

一方、下エジプトのメリムデ遺跡では、同様に底部片のみが 2 個体出土している。底部形態を見る限り、この 2 個体もそれぞれ丸底と平底を呈するものであることがわかる。しかしながら、バダリ遺跡出土のものとは、胴部への立ち上がり方からみて類似する器形である可能性は低い。バダリ遺跡出土の石製容器と比べて、両者とも胴部にかけてさらに外湾することが見て取れる。

(2) ナカダⅠC～Ⅱ A-B 期（形成期）

ナカダ文化期に入ると、前時期よりも一定量の石製容器が製作されるようになる。上エジプトでは、口縁部が大きく外反し、内湾する胴部をもつ平底のビーカー形を呈するⅠ類と、把手と脚台が付いた壺形のものであるⅢ類が主流となる。また、Ⅳa 類が一点出土する。Ⅱ A-B 期にⅡa 類が出現し始めるが、Ⅰ類とⅢ類の主体となる状況に変化は認められない。同じく、下エジプトではマアディ遺跡で出土したもので、Ⅲa 類およびⅢc 類に相当する器形とⅠ類に相当する器形が大部分を占める。当該期では安定してⅠ類およびⅢ類が支配的である傾向が窺える。

この時期に主流であるⅢ類は、南メソポタミアに同一の器形がみとめられるという（Arkell and Ucko 1965: 152)。例えば、ウルクの白色神殿からⅢ類に特徴的な円錐形あるいはボタン状の脚台をもつ石灰岩製や黒曜石製の容器片が出土しており、南メソポタミアの石製容器がⅢ類にあたる器形の祖型であると考えられている（Baumgartel 1955: 106-107)。また、Ⅲ類は、大半が硬質な石材である玄武岩を素材として製作された。先王朝時代を通じて石製容器の素材となった玄武岩は、化学分析によってファイユーム北部と周辺に位置する産地から採掘されたことがわかっている（Mallory-Greenough 1999)。近郊のマアディ遺跡で製作されたⅡ類に属する石製容器は、おそらくマアディから上エジプトへの搬入によってもたらされたことが想定でき（Mallory-Greenough 2002)、ガイオット（Guyot, F.）は当該期上エジプト出土の玄武岩製容器を下エジプトからの交換財として位置づけている（Guyot 2008)。翻ってⅠ類は、エジプト・アラバスターまたは石灰岩といった軟質の石材に限定され、おそらくは遺跡の近郊、少なくとも上エジプト地域内で獲得可能な石材を用いていたと考えられる。

先行する新石器文化期の石製容器はバダリ遺跡出土のものが底部からおおよその器形を判断することができるが、後続するナカダ文化ⅠC 期からⅡ A-B 期に年代づけられる容器形態には引き継がれていないようである。Ⅰa 類およびⅠc 類についてはむしろ新石器文化期の象牙製容器にその器形の系譜を求めることができるだろう（Arkell and Ucko 1965: 152; Adams 1988: 33)。マハスナ遺跡のⅠC 期に年代づけられる H29 号墓からⅠa 類を呈する象牙製容器と石製容器が共伴して出土するからも、当器形は象牙製容器の器形を原形として製作されたと考えられる。なお、当該期のⅠa 類の素材は石灰岩およびエジプト・アラバスターが独占的であり、色調・硬度ともに象牙のそれらに求めた可能性が高い。このような石材選択と器形は、象牙製容器の製作技術をもって加工したことを示唆しているかもしれない。

このようにⅠC 期の上エジプトには、バダリ文化の象牙製容器から影響を受容したⅠa 類およびⅠc 類、下エジプト・マアディ遺跡から搬入されたⅢ類が主流である。言い換えると、バダリ文化の象牙製容器に伝統的系譜をもつエジプト・アラバスターおよび石灰岩製容器と、下エジプトのブト・マアディ文化の石製容

器に系譜をもつ玄武岩製容器といった 2 系統が存在していたことが指摘できる。両者は明確に硬度が異なるため、その加工には異なる技術が運用されていた可能性が高い。Ⅱ A-B 期になって新たな器形が出現し始めても、上エジプト地域内でこれら 2 系統の石製容器が支配的な様相は継続していたと考えられる。

ここでⅠ C ～Ⅱ A-B 期のⅠ類とⅢ類の分布状況を確認すると、Ⅰ a 類はナカダ遺跡からアムラー遺跡に偏在していることがわかる（図 4）。また、マトマール遺跡およびバダリ遺跡ではⅠ a 類の出土がみられず、マアディ遺跡からの搬入品と考えられるⅢ類の指向性が強い。つまり、バダリ文化の象牙製容器に系譜をもつⅠ類は、ナカダ遺跡からアムラー遺跡までの上エジプトの中でも文化的に核となる範囲内で出現したと考えられる。Ⅰ類とⅢ類の間には分布状況にも明確な差異がみとめられる。

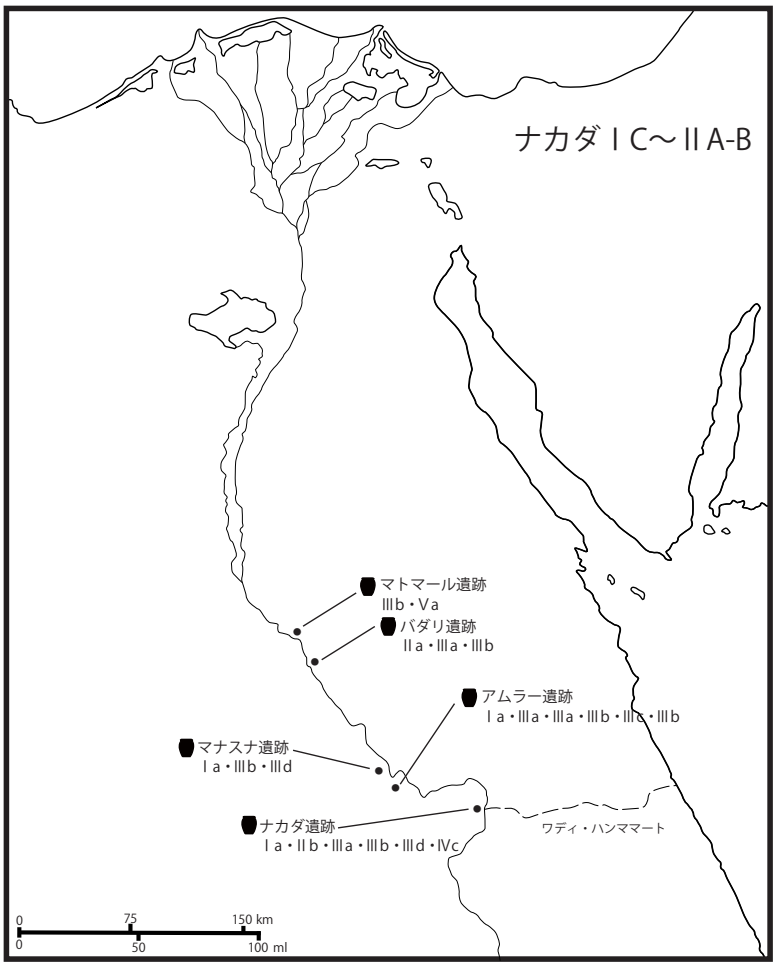

図 4　ナカダⅠ C 期からⅡ A-B 期（形成期）における石製容器の分布

(3) ナカダⅡ C-D 期（展開期）

上述したように、当該期に石製容器の主流となる器形とその分布は大きい変化を示す。Ⅰ類とⅢ類に取って代わるようにⅡ類とⅣ類が急増し、また素材も主に東部砂漠に産地が知られている火成岩類や硬質岩石の使用が増大する。Ⅰ類とⅢ類も若干数出土し、Ⅰ b 類とⅠ d 類が新たに出土するようになる。新石器文化期の象牙製容器に口縁と底部が広く外反する器形が確認できるため、両者もまた象牙製容器に系譜をもつ器形と考えて差し支えないだろう。

Ⅱ A-B 期までⅠ a 類はエジプト・アラバスターおよび石灰岩、Ⅲ類は玄武岩という器形ごとの明確な石材選択にあったが、当該期より器形と石材の間にある選択性は乖離する傾向にある。とくにⅡ類に関してエ

ジプト・アラバスターや石灰岩、角礫岩、斑岩、花崗岩、玄武岩といった多様な石材が用いられる。

広範囲にわたる分布の拡大と絶対数の増大を見せるⅡ類に最も特徴的な属性であるものの一つに管状を呈する把手が挙げられ、それまで支配的であったⅢ類の把手とは形態上一線を画す（図５、６）。このような把手を付属する容器は、ナイル川下流域以外で求めることはできず、前時期までの影響関係にある石製容器の系譜とは異なる延長線上にあることが指摘できる。また、Ⅲ類を特徴づける円錐形の脚台もⅡ類には付属しない。加えて、当該期にはⅡ類の器形を土器へ模倣する行為も急増する（Spencer 1993: 37）。ピートリが設定したクラスの装飾土器（D-Ware）であり、この土器には、Ⅱ類に多く用いられた東部砂漠で産出する斑岩や角礫岩といった石材の自然な柄を土器上に装飾として表現する例を多く見ることができる（図７）。上述したように、器形と石材の間にある選択性の崩壊からも、前時期とは異なる系譜にあることが指摘できるだろう。

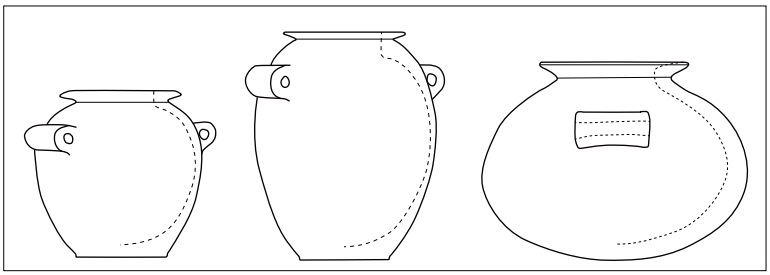

図５　管状把手付き壺（本論におけるⅡ類）
（Brunton and Caton-tompson 1928: Pl.LI を元に作成）

図６　耳状把手（本論におけるⅢ類）
（Rizkana and Seeher 1988: Pl.102 を元に作成）

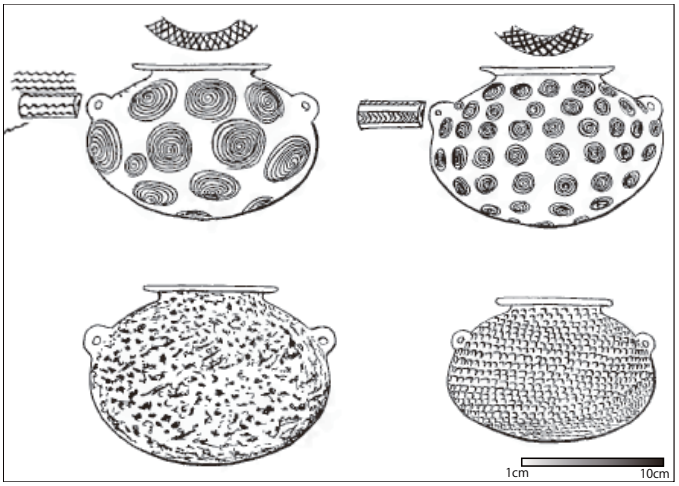

図７　装飾土器（Petrie 1896: Pl. XXXV を元に作成）

当該期では、上エジプト地域では新たにモスタゲッダ遺跡で出土するとともに、下エジプト地域のハラゲ遺跡やゲルゼ遺跡でも認められるようになる（図８）。上下エジプト間ではⅣ類の多寡において差異があるものの、Ⅱ類は両地域間を通して出土する。一方で、ナカダ遺跡やアムラー遺跡、マハスナ遺跡ではⅢ類を未だ堅持しつつも、下エジプトの両遺跡ではⅢ類が欠落している様相が窺える。また、Ⅱ類はマハスナ遺跡を除く各遺跡で確認できる。とりわけナカダ遺跡はⅡ類の全バリエーションが出土していることから、Ⅱ類はナカダ遺跡あるいはナカダ遺跡を核とする地域内で出現したと想定できる。東部砂漠へ容易にアクセスできるワディ・ハンママートに近接している地理的立地条件とⅡ類の多くが東部砂漠由来の石材を素材としていることも、その傍証となるだろう。

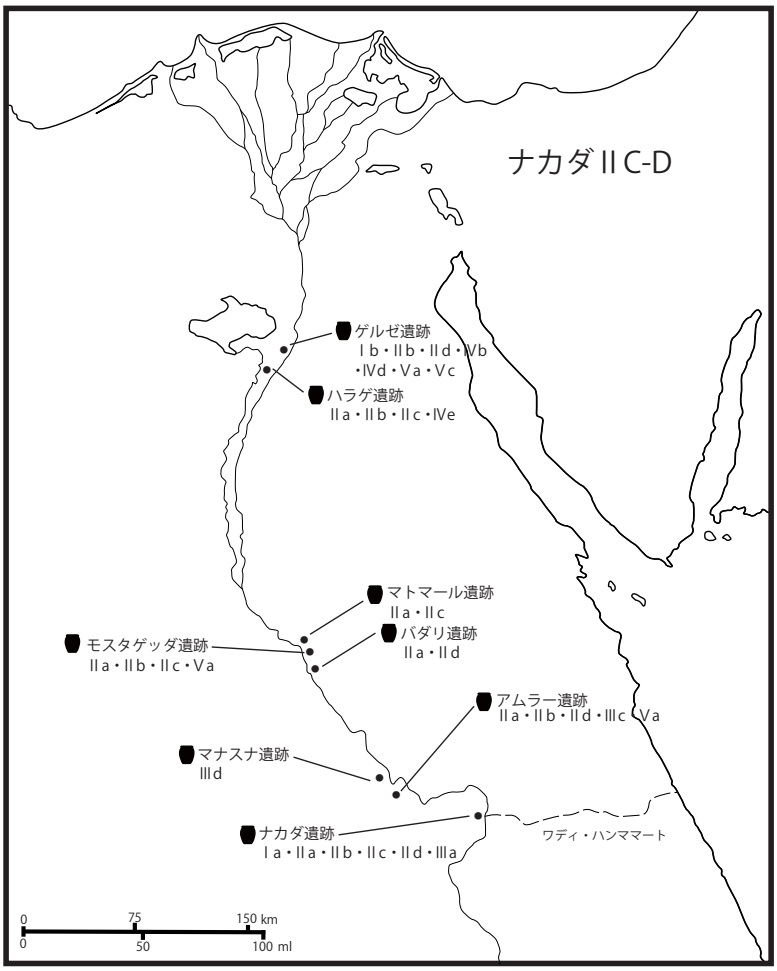

図 8　ナカダⅡ C-D 期（展開期）における石製容器の分布

(4) 小結

ここまで石製容器の系譜関係を見てきたように、ナイル川下流域で出土する先王朝時代の石製容器は、多方面からの模倣・影響によってその器形が創出され、主として素材を異にする容器から器形のアイディアを下地に製作されていた。出現の要因・影響を明瞭に求めることができないまでも、新石器文化期には土器あるいは磨石から、Ⅰ C ～Ⅱ A-B 期には新石器文化期に属する象牙製容器や南メソポタミアの石製容器の器形から、各々の石製容器は確固たる原形の影響によって形成されてきたのである。とりわけ上エジプト地域で出土する石製容器は、輸入品あるいは一方的に他の要素の受容で構成されていることが指摘できる。Ⅱ A-B 期に管状把手がつく壺形であるⅡ a 類が出現するものの、少量であり、未だ上エジプトの石製容器は他地域・他要素の影響を受けた器形が専ら主体を占めていた。つまり、当該期まで上エジプトの石製容器は一方向の受容による模倣関係の系譜上にあったと言える。しかし、Ⅱ C-D 期におけるⅡ類の急増は、上エジプトの石製容器として独自の器形・系列の確立と前時期までの系譜との代替を意味し、原形と遊離する。いわば、原形のアイディアの在地化と呼称できる。なお、分布状況などからその出現地あるいは製作の中心となった地域にナカダ遺跡を挙げられるだろう。

こうした模倣関係という視座に立脚すると、上エジプトの石製容器においてⅡ A-B 期とⅡ C-D 期では大きな断絶がある（図 9）。Ⅱ C-D 期に主流となるⅡ類は、その器形の起源を他地域および土器や象牙製容器

といった素材を異にする容器形態に求めることができない。とりわけ管状把手については特徴的な属性であると言える。また、当該期にⅡ類は土器型式に模倣され、他容器へ影響を与える側へと変容する。前時期までとは逆転現象にあったと指摘できよう。

Ⅱ類の急増は、単純な器形の漸次的な変遷ではなく、上エジプト地域、とくにナカダ遺跡を中心とした異なる系譜・系統へのシフトであった。問題は系譜が異なるⅡ類が、どのような影響下で生み出されたかである。次章からⅡ類の出現について論を展開していく。

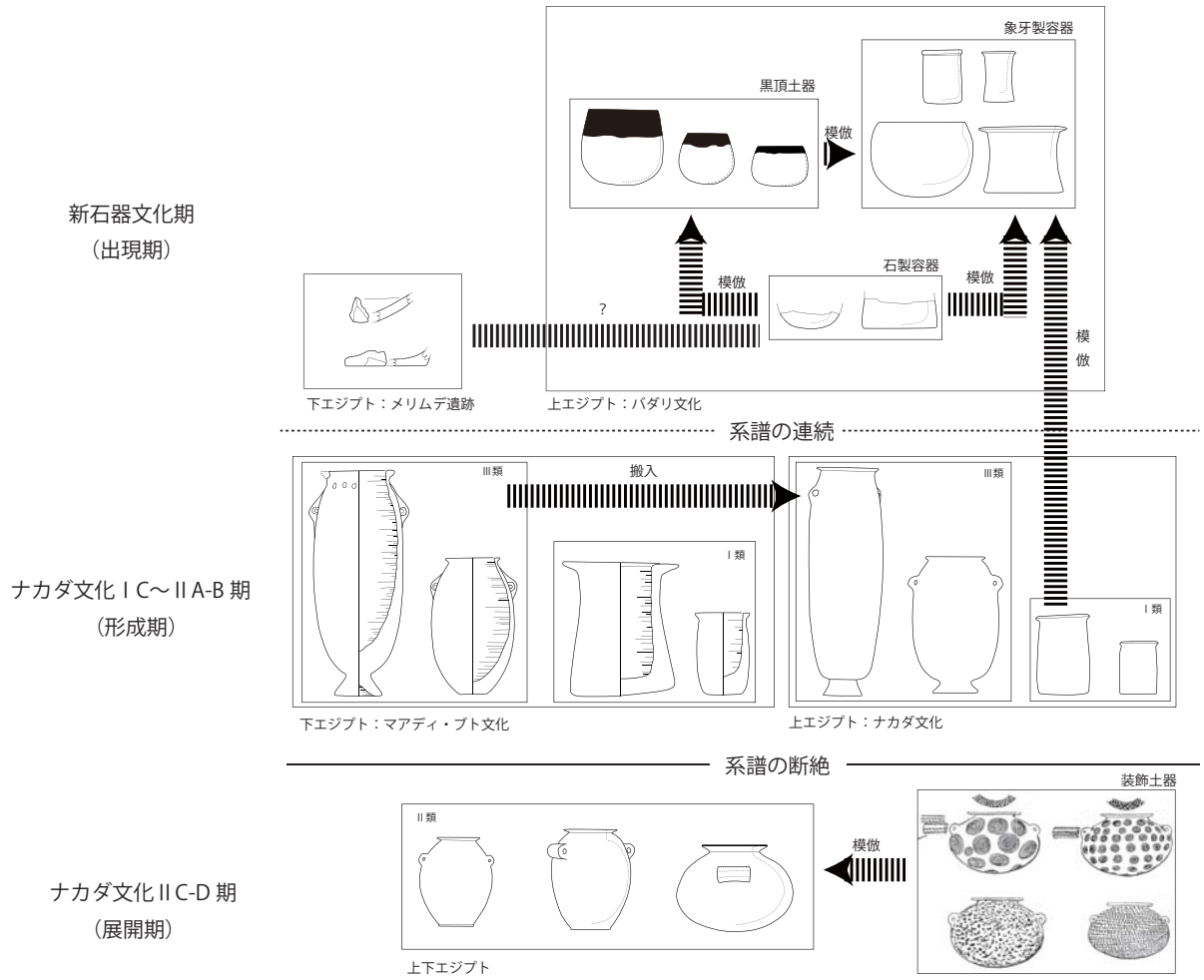

図９　新石器文化期からナカダⅡC-D期の石製容器の系譜

３．上エジプト固有の石製容器の出現とその背景

前述の通り、Ⅱ類がもつ属性の中でも最も特徴的かつ原形が他地域および他容器に見られない属性は管状把手である。あくまで形状からみた推測であるが、耳状把手は表面を小丘状に整形したのち、ちょうど輪状になるように一方向から穿孔する方法が用いられていたと考えられる（図５）。管状把手は管状を呈する明確な把手の形状に整形したのち、一方向あるいは両方向から穿孔する方法にある（図６）。より長く穿孔しなければいけない後者の方が高度な技術を要することは明らかであろう。Ⅱ A-B 期まで主流であったⅢ類の耳状把手と形態上一線を画す管状把手は、おそらくこのような穿孔技術の変化・高まりに裏打ちされた管

状への志向性を表していると考えられる。その傍証として、同じく管状に穿孔して加工されるビーズの穿孔技術の変化を見ていくことにする。

石製容器における把手の作出には一定の穿孔技術を必要とする。ストックス（Stocks, D. A.）によると、石製容器の内面加工において先王朝時代の初期では葦の茎を用い、ナカダⅡ期には銅製の管状ドリルで穿孔していたとされているが、把手の穿孔については言い及んでいない（Stocks 1999, 2003）。一方で、ビーズの穿孔技術については、ヒエラコンポリス遺跡の HK29A やカシェからビーズの原礫および未成品と細石刃のドリルが共伴して出土することから[3]、先王朝時代においてビーズの穿孔に細石刃のドリルの使用が指摘されている。ビーズと把手の穿孔技術を形状から類推すべく、ここで管状を呈するビーズと把手の形状変化を分析した（表 3）。すると、Ⅱ A-B 期までの円盤形ビーズが主流を占める様相から、Ⅱ C-D 期に管状ビーズが急増し[4]、ちょうど耳状把手をもつⅢ類から管状把手のⅡ類へのシフトと同調する傾向にあることがわかる（表３）。したがって、石製容器の把手にも同様の技術が運用されていたと想定することも可能であるが、一概にそうとは言えないまでも、管状への志向性がⅡ C-D 期を境として、あるいはⅡ類の出現と展開を境として高まっていたと考えられる。また、Ⅱ C-D 期ごろに冶金技術の発達やシナイ半島および東部砂漠の鉱物資源の開発によって銅製工具が増加したこともあり、石材を加工する技術が飛躍的に進展したこともその背後に見ることができる（Adams and Cialowicz 1988: 28-30）。石材の種類あるいは把手の孔のサイズに応じて、細石刃と銅製ドリルを使い分けていたのかもしれない。ただし、管状把手がⅠ C 期からすでに存在する管状ビーズの模倣と解釈することも可能であるかもしれないが、ここでは差し控えて「管状に穿孔する技術の向上および管状への志向性」の傍証としてだけ捉えておきたい。なお、Ⅱ C-D 期に石製容器には多様な石材が用いられると述べたが、ビーズに関しても同様である（表４）。多様な石材・鉱物を加工する技術が石製品一般に運用された可能性が高い。

以上のことから、Ⅱ類およびⅡ C-D 期において器形から見られた断絶は、技術的系譜においても異なっていたと考えられる。上エジプト地域で生起した固有の属性である管状把手は、穿孔技術の向上・変化を一つの背景とした内的動因によって生み出された可能性が高い。当該期にⅡ類は上下エジプトを通じて出土するようになることからも、上エジプト内部で発展した固有の石製容器と捉えることができる。また、Ⅱ C-D 期に達成される「文化的統一」と機を同じくしているため、ナカダ文化が下エジプトへ波及した社会的背景の一つを物語っているとも言える。

４．おわりに

最後に本論で得られた見解をまとめ、今後の課題と展望を示しておきたい。

本論では、先王朝時代ナカダ文化Ⅰ C 期からⅡ D 期における石製容器を扱い、形態分類を試みた。そして、土器の器形や象牙製容器の形態との比較などから、Ⅱ A-B 期までは影響を受容する側であった上エジプトの石製容器が、Ⅱ C-D 期に移行した際に影響を与える側・模倣される側へと変容したことを指摘し、分布状況および石材構成からⅡ類はおそらくナカダ遺跡を中心とする地域で生起していた可能性を提示した。いわば、外因から内因といった変化の様相にあったと想定する。また、Ⅱ類に最も特徴的な管状把手は、管状ビーズとの穿孔技術の共有あるいは管状への志向性を一つの影響として生み出された属性であることを指摘した。模倣と技術という視点から石製容器の変遷を辿ると、Ⅱ C-D 期を境としてそれまでとは明らかに系譜の異なる石製容器が上下エジプトを通じて展開される。

ただし、把手とビーズにおける形態的な類似とその変化の同調ついては、必ずしも同じ工人集団が石製容器製作およびビーズ製作に携わっていたことを表していると断言することはできない。把手の作出とビーズ

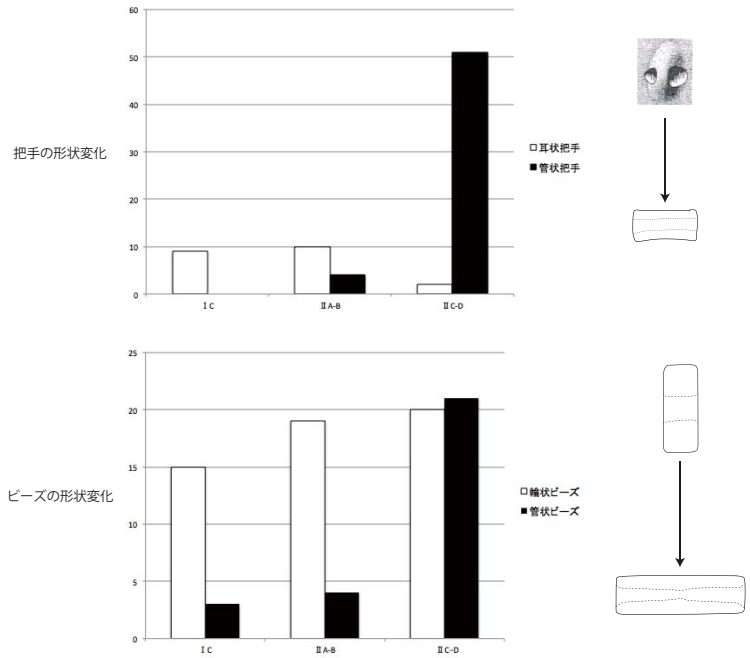

表３　把手の形状変化とビーズの形状変化（上段：管状把手と耳状把手　下段：円盤形ビーズと管形ビーズ）

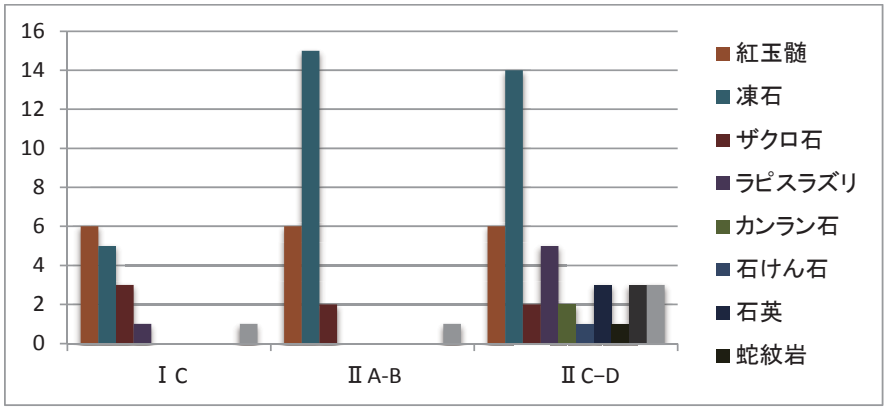

表４　バダリ遺跡出土ビーズの石材・鉱物構成の変遷

の穿孔双方に用いられた道具や技術をさらに模索していく必要がある。

また、今回の考察結果から、先行する分類案そのものにも再検討する余地があると考える。例えば、リツカーナとシーハーは、本論でいうⅢａ類とⅡ類を同一のタイプとして認識しているが（Rizkana and Seeher 1988）、把手の顕著な属性変化を勘案するとこれら２類は分けなければいけない。Ⅲ類についても、その祖型である南メソポタミアの石製容器との型式および編年上の精査をしていくべきである。

本論では、石製容器を定量的に分析した反面、土器の器形や象牙製容器については具体的に分析しなかったため、未だ双方の対応関係が不明瞭であり、実証性に欠ける部分があることは否めない。それに、あくまで器形からみた推論の域は脱することができなかったため、今後は石製容器と石製ビーズ双方の製作実験を通して追証する必要性にある。今後、様々な石材・鉱物ごとの製作実験を行い、それぞれの製作技術の選択を考えていくことが不可欠となってくるだろう。

謝辞

末筆ではありますが、本稿を草するにあたり、早稲田大学文学学術院近藤二郎教授には、日頃から多大なご指導を賜りました。早稲田大学エジプト学研究所の河合望先生、馬場匡浩先生には多くのご指導・指摘を頂きました。早稲田大学社会構築論系助手の長屋憲慶氏には、幾つもの有益な視点とご指摘を頂きました。ここに記して感謝いたします。

註

1) 本論の分類設定に用いた資料は上下エジプトから出土したものであるが、時期の細分が不明瞭のためマアディ遺跡は除外している。マアディ遺跡は概ねナカダ文化期のＩＣ期からⅡＢ期にかけて営まれたため、本論で提示しているマアディ遺跡の資料はその時期に該当する。
2) lug-handle と呼ばれる把手であるが、その形状から本論では「耳状把手」と訳す。
3) ヒエラコンポリス遺跡 HK29A 地区では、ナカダⅡ期中葉の神殿址とそれに付属する工房址が検出されており、当遺構からビーズの原礫や加工に用いられたであろう細石刃が大量に出土した。また、当該遺跡におけるホルス神殿（Later Temple）外壁の基礎部で検出されたカシェからは、ビーズの原礫や加工に用いたと考えられるフリント製マイクロドリルが出土している（Quibell and Green 1902: 11-12）。グリーンらによると、破損した紅玉髄の原礫やチップ状のビーズの未成品（アメジスト・水晶）、黒曜石の剥片などが埋納されており、ビーズの製作が行われていた痕跡を示すと考えられている。
4) 本論において円盤形（Disc-shaped）と呼称するビーズ形態は、ブラントン（Brunton, G）らによるバダリ遺跡の調査報告書に掲載されているタイプ 86 であり、同様に管形（Tubular-shaped）はタイプ 75-79 に当たる（Brunton and Caton-tompson 1928: Pl. XLIX-L）。表 3 のビーズの形状変化は、バダリ遺跡出土ビーズを資料としている。

参考文献

Adams, B. and Cialowicz, K. M.
1988 *Predynastic Egypt*, Aylesbury.
Arkell, A.J. and Ucko, P.J.
1965 “Review of Predynastic Development in the Nile Valley”, *Current Anthropology* 6, pp.145-166.
Aston, B.G.
1994 A*ncient Egyptian Stone Vessels: Material and Forms*, Mörlenboach.
Aston, B.G., Harrell, A.J. and Shaw, I.
2000 “Stone”, In Nicholson, P.T. and Shaw, I (eds.), *Ancient Egyptian Materials and Technology*, Cambridge, pp.5-77.
Baumgartel, E.J.
1955 *The Culture of Prehistoric Egypt*, London
1960 *The Culture of Prehistoric Egypt II*, London, New York, and Toronto.
Brunton, G.
1937 *Mostagedda and the Tasian Culture*, London.
Brunton, G.
1948 *Matmar*, London.
Brunton, G. and Caton-Tompson, G.
1928 *The Badarian Civilisation and Predynastic Remains near Badari*, London.
Finkenstaedt, E.
1980 “Regional Painting Styles in Prehistoric Egypt”, *Zeitchrift fur Agyptische Sprache und Altertumkunde* 107, pp.116-120.
1981 “The Location of Styles in Painting White Cross-Lined Ware at Naqada”, *Journal of American Research Center in Egypt* 18, pp.7-10.
Guyot, F.
2008 “The origins of the “Naqadan Expansion” and the Interregional Exchange Mechanisms between Lower Nubia, Upper and Lower Egypt, the South Levant and North Syria during the First Half of the 4th Millennium”, In Midant-Reynes, B and Tristant, Y(eds.), *Egypt at Its Origins 2*, Leuven, pp.707-740.

Harrell, J.A. Brown, V.M. and Masoud, M.S.
2000 “An Early Dynastic Quarry for Stone Vessels at Gebel Manzal El-Seyl, Eastern Desert”, *The Journal of Egyptian Archaeology* 86, pp. 33-42.
Hendrickx, S.
2006 “Predynastic-Early Dynastic Chronology”, In Hornung, E., Krauss, R. and Warburton, D.A. (eds.), *Ancient Egyptian Chronology*, Leiden, pp. 55-93.
El-Kouli, A.
1978 *Egyptian Stone Vessels: Predynastic Period to Dynasty III: Typology and Analysis*, Mazin, Rhein.
Kroeper, von. K. and Wildung, D.
1994 *Minshat Abu Omar I Ein vor und frühgeschichtlicher Friedhof im Nildelta Gråber 1-114*, Mainz
2000 *Minshat Abu Omar II Ein vor und frühgeschichtlicher Friedohof im Nildelta Gråber 115-204*, Mainz
Lucas, A. and Harris, J.R.
1989 *Ancient Egyptian Materials and Industries*, London.
Mallory-Greenough, L. M.
1999 “The Stone Source of Predynastic Basalt Vessels: Mineralogical Evidence for Quarries in Northern Egypt”, *Journal of Archaeological science* 26, pp.1261-1272.
2002 “The Geographical, Spatial, and Temporal Distribution of Predynastic and First Dynasty Basalt Vessels”, *The Journal of Egyptian Archaeology* 88, pp.67-93.
Mond, R.
1937 *Cemeteris of Armant I*, London.
Payne, J.C.
1987 “Appendix to Naqada Excavations Supplement”, *The Journal of Egyptian Archaeology* 73, pp.181-189.
1993 *Catalogue of the Predynastic Egyptian Collection in the Ashmolean Museum*, Oxford.
Petrie, W.M.F.
1896 *Naqada and Ballas*, California.
1901a *Diospolis Parva: The Cemetries of Abadiyeh and Hu 1898-9*, London.
1912 *The Labyrinthe Gerzeh and Mazghuneh*, London.
1913 *Tarkhan I and Memphis V*, London.
1920 *Prehistoric Egypt*, London.
Philip, G. and Baird, D.
2000 *Ceramics and Change in the Early Bronze Age of the Southern Levant*, Sheffield.
Quibell, J.E. and Green, F.W.
1902 *Hierakonpolis II*, London.
Randall-MacIver, D. and Mace, A.C.
1902 *El Amrah and Abydos*, London.
Rizkana, I. and Seeher, J.
1984 “New Light on the Relation of Maadi to the Upper Egyptian Cutural Sequence”, *Mitteilungen des Deutschen Archaologischen Instituts Abteilung Kairo* 10, pp.237-252.
1987 *Maadi I: The Pottery of the Predynastic Settlement*, Mainz.
1988 *Maadi II: The Lithic Industries of the Predyastic Settlememt*, Mainz.
Shaw, I.
2012 “Stone-Working: the Synthesis of Traditional Chaines Operatoires and Ideological Innovations”, In Shaw, I. (ed.), *Ancient Egyptian Technology and Innovatio*n, London, pp.55-76.
Spencer, A.J.
1993 *Early Egypt: The Rise of Civilization in the Nile Valley*, London.
Stocks, D.A.
1993 “Making Stone Vessels in Ancient Mesopotamia and Egypt”, *Antiquity* 67-256, pp.596-603.
1999 “Stone Vessels and Bead Making”, In Bard, K.A. (eds.), *Encyclopedia of the Archaeology of Ancient Egypt*, London and New York, pp.749-751.
2003 “Making Stone Vessels”, In Stocks, D.A. (eds.), *Experiments in Egyptian Archaeology: Stoneworking Technology in Ancient Egypt*, London and New York.
Ttundzic, S.
1993 “A Consideration of Differences between the Pottery Showing Palestinian Characteristics in the Maadian and Gerzean Cultures”, *The Journal of Egyptian Archaeology* 79, pp.33-55.

エジプト学研究　第 19 号
2013 年 3 月 31 日発行

The Journal of Egyptian Studies No.19
Published date: 31 March 2013

発行所 / 早稲田大学エジプト学会
〒 169-8050 東京都新宿区戸塚町 1-104
早稲田大学エジプト学研究所内
発行人 / 吉村作治

Published by The Egyptological Society, Waseda University
1-104, Totsuka-chyo, Shinjyuku-ku, Tokyo, 169-8050, Japan
© The Institute of Egyptology, Waseda University